

ネガティブな経験が 生み出すゆたかさ

試行錯誤のゆたかさが実りのゆたかさをもたらすことは、科学技術の進歩のプロセスを見れば明らかだろう。スポーツの世界でも勝った試合より、負けた試合のほうがより多く学べるものである。幾多の失敗から学ぶことで、人類の歴史も前進を続けてきた。人の成長もまたそうであるだろう。

教育の世界に成果主義が席卷する時代になっている。だが、教育における成果とは何だろうか。子どもが学び育つという目に見えないとなみには、複雑で微妙多様な契機や道程がある。そこでは、つまずきや失敗、揺れや惑い、悩みや苦しみ、弱さや傷さえもがゆたかな成長の伏線となり、そうした「負（マイナス）」とされる要素こそが発達や前進に転化する原動力となる。

また今日、「学力向上」が至上の価値として学校と教師を圧している。だが、「学力」とは何だろうか。授業のなかでの間違いや疑問、試行錯誤にこそ子どもの学びのゆたかな内実があり、効率でははかれず点数では表すことができない真の学力とかけがえない学びの魅力が潜んでいる。

授業でも生活指導でも、子どもの発達や教師の成長にとっても、それは「なぐさめ」の論理ではなく、教育の「本質」であることを実証したい。

4月の教師たちはだれもが新鮮な思いで教壇に立つ。意に沿わない競争や評価の視線にとらわれず、ネガティブなできごとからも生まれるゆたかな教育の果実を求めて、元気に教室に向かいたいと願う。